

春や花やら碁老人

北野寿碁碁同好会 刀根正樹

「梅の香や 黙禱の声 石落し」

「白梅よ 石の悲しみ 知るや君」

「白梅に 石の重さを たずねたり」

うぐいすが鳴いていた。長く厳しい寒さの冬であった。梅もようやく満開である。3月11日。北野市民センターで定例の碁碁会が行われていた。「黙禱」という絶叫が突如起こった。泣くがごとく、うめくがごとく。津波に子をさらわれた親の叫びかと思った。私は碁石を取り落した。それはどこまでも床をころがって行き、見えなくなった。

「心しむ 野口みずきの 涙かな」

「紅梅も 女子マラソンを 応援し」 名古屋女子マラソン。ロンドンへの選考レースである。私の目は野口みずきに釘づけになった。アテネ五輪の金メダリスト。その後いばらの道が続き、復活をかけた。野口はずっと先頭を走り続けた。17kmで遅れ始め、24秒ほど先頭から離された。テレビ画面に点のような小さかった野口の姿が、気のせいとか少しづつ大きくなり、次第に近づき、ゴジラのようにでかくなった。28kmでついに先頭に躍り出たのである。「すばらしい走りに変わった」とアナウンサーが感激した。結局6位でゴールし号泣した。「走り切れて、うれしかった。」と言った。私には野口の幸福感が痛いほどわかった。私も碁碁にずっと情熱を抱き、ここまで走り続けて来たのであった。

「桜咲き 静御前の 夢の舞」

「吉野山 千本桜の 愛の果」

上野の山で友人と花見をし、酒をくみかわした。桜の花が手の届く近さに満開である。

「吉野の千本桜もかくあらん。来年もこうして旧交をあたためたいな」 西郷さんの銅像の下のビルに碁碁所がある。私は白を持ち、黒をズタズタに破った。「ヒヨドリ越えの逆落としか。君は義経の生まれ変わりか」 八王子に帰り、北野天神で一人花見をした。「落花の雪に踏み迷う、北野の花の桜狩りか」

神楽の舞台上、白衣の美女が舞っている。「吉野山 嶺の白雪踏み分けて 入りにし人の跡ぞ恋しき」「しづやしづ賤のおまき繰り返し 昔を今になすよしもがな」

私は目をぬぐった。静御前ではないのか。彼女は私を見詰めていたが、やがて音もなく消えた。酔いはさらにまわり、浅川の堤防の上を私はさすらった。かつて桜の名所であったが、多くは切り取られ、わずかに残った木が花を咲かせていた。ふと視線を感じた。河原に白鷺がいて、私をじっと見詰めていた。それは静御前の目であった。その鳥はしばらくそこにいたが、ふと羽ばたき、一声うれしそうに鳴き、西の空に静かに飛び去って行った。春のはかない夢であった。

「女子ゴルフ いづれアヤメ カキツバタ」

「藍ちゃんに あこがれプロの 花が咲く」 今年若くは若い美女の当たり年とか。第一戦の沖縄。シンデレラの登場である。斉藤愛璃。新人プロ。ビジュアル系の美人。優勝して、テレビ、スポーツ紙、サイン会にひっぱりだこの人気者になった。第二戦の高知は、韓国の超人気の美姫、イボミ。愛称スマイルキャンデー。第四戦の静岡は笠リツ子。第六戦熊本は若林舞子。いずれも若く美しい。ベテランの横峯さくらなどは、どうしたのか。4月22日、ハワイで宮里藍がアメリカツアーのロッテ選手権で8度目の優勝をし、歓喜のフラダンスを踊った。同日、川奈の富士コースで、小柄な山形美人が勝った。大江香織。幼い頃から藍ちゃんをテレビで見てもあこがれた。7歳からクラブをにぎり、コースに出た。藍の出身高の東北高校に進学。ナショナルチームにも選ばれた。卒業後プロ一発合格。3年目22歳で、川奈で初優勝をした。苦楽をともにした母は号泣したが、本人は笑っていた。「藍先輩と世界の舞台上、優勝あらいそいすることが夢です。」その笑顔は、しあわせにあふれていた。よき先輩は、すばらしい後輩をはぐくむと感動した。

「アジサイや 碁に負けたどる 道に咲き」

子規の句に「碁に負けて たどる恋路や 春の雨」というのがあるが、今の私の恋路は、市民センターを後にしてわが家にたどる道であろう。ここには四季折々さまざまな花が咲く。梅雨の中に優雅なほほえみを見せるアジサイには、歴史上の女性の面影を見る。

細川ガラシャ夫人。明智光秀の娘で、玉と呼ばれた絶世の美女であった。細川忠興の妻になる。光秀が主君の織田信長を本能寺で殺した。彼女は逆臣の娘となり、以後は苦難の道を歩み、クリスチャンになり、救いを求めた。時は流れ、関ヶ原の戦いがあり、石田三成は人質作戦に出た。キリシタンの細川ガラシャは、辞世を残し、老臣の槍で天国へ旅立った。

「散りぬべき 時知りてこそ 世の中の 花は花なれ 人も人なれ」

石の死活を学ぶ私には、胸にひびく歌だ。

「死ぬべき 時知り手こそ 盤上の 石は石なれ おれもおれなり」

この春は、花が一段と美しく見えた。桜を見て散った神風特攻隊の心が、ようやく判るようだ。私の死期は近づきつつあるのか。

「刀根さんは、長く生きてください。私の分までずっと」 アジサイがほほえんだ。桜のように散り急がず、梅雨の中をその花はしぶとく咲き続ける。それはガラシャ夫人の生きざまを語っている。私もまた暮の中にアジサイのような生命力を求めたいと思った。

(八碁連だより 6月号 第250号 2012年6月1日)